

大黒天図

七福神とは、一般的に恵比須・大黒天・弁財天・毘沙門天・布袋・福祿寿・寿老人の七神をいいます。それらはもともと個別の神々であったものですが、竹林の七賢人などの趣向にならって、七つの福神としてまとめられ、人々に信仰されました。「七」は聖数として好まれた数字でした。七福神の中でも、恵比須と大黒天は代表的福神で、都市部では商売繁盛の神として、そろって屋内の神棚に祀られました。

この大黒天図は、俵の上に大きな福袋と打出の小槌を持って座っている姿を描いています。このような姿の大黒天は、室町時代に作られたもので、記紀(古事記と日本書紀)神話にある^{おおくにぬしのみこと}大国主命と習合したためです。本来の大黒天像は、^{さんめんろっぴ}三面六臂で^{ふんぬ}忿怒の形相をした神で、インドでは強暴な戦闘神として恐れられていました。ところが中国に伝わると、厨房を守る善神として信仰され、わが国にも食堂や台所を守る神として伝えられました。とりわけ天台宗では、比叡山に大黒天が祀られ、同宗の展開とともに寺院の守護神、厨房神として全国に広まりました。川越の天台宗古刹^{こさつ}喜多院には、その境内に大黒天像が祀られています。

本図は、最後の川越藩主松平周防守家の家臣太田家に伝来したもので、筆者は松平周防守家の御用絵師橋本雅邦(1835~1908)です。右下の落款は「勝園克己齋」、印章は朱文円印で「任吾真」とあります。雅邦が「勝園」号をいつから使用したかは不明ですが、安政元年(1854)頃描かれたとされる「竜虎図」には「勝園筆」の落款があると報告されています。また、落款にある「克己齋」の号は、晩年まで印章として使われていますが、「勝園克己齋」と署名があるのは珍しいようです。本作は、なお考察を加えるべき作品といえます。



シンポジウム「戦国時代のかわごえ」を開催しました。



黒田基樹氏



佐々木健策氏



齋藤慎一氏

はじめに

去る10月6日(土)、当館の事業としては初めてのシンポジウムとなる「戦国時代のかわごえ」を開催しました。多数の応募が予想されたため、参加申込を往復はがきとしましたが、予想を大幅に上回るたくさんの申込をいただいたため、視聴覚ホールに補助席を設けて定員を増やして抽選を行いました。また、抽選に漏れた方にはビデオルームを特設会場として、大型モニターに会場の映像と音声を流し、一人でも多くの方に視聴していただけるようにしました。実際には、両会場とも満席になるほど多くの方におこしいただき、不自由をおかけしたことと思います。

戦国時代の関東地方と最近の研究

今回は川越城築城550年記念事業にあわせ、第30回企画展「後北条氏と河越城」の開催に連携するかたちでシンポジウムを開催いたしました。川越城は絵図などに伝わる江戸時代の姿が多く知られていますが、戦国時代の河越城については、あまり語られることがありませんでした。

では、戦国時代の川越周辺について、まず触れておきましょう。

室町時代の関東には幕府の出先機関である鎌倉府が置かれ、その長官くほう(公方)として足利氏がおりました。その補佐役である関東管領は代々上杉氏が継いでいましたが、管領上杉氏が力をつけてくると、公方と管領の間に対立がはじまり、幾度かの争いによって、公方は鎌倉を落ち、古河に御所を構えました。これを古河公方といいます。一方、上杉氏のうち、管領職を継ぐ山内上杉家は鎌倉の争乱を避けて領国である上野国平井城を本拠とし、その分家である扇谷上杉家おうぎがやつが相模国糟屋かすや(現神奈川県伊勢原市)を本拠としました。扇谷

上杉家は河越・江戸両城を築城すると、川越を本拠とし、家臣の太田道灌を江戸城に配して南関東を治めました。

古河公方が幕府に敵対していたことから、幕府は関東の出先機関がなくなったため、改めて公方を関東に派遣しますが、すでに関東は上杉氏らの力が強く、新しい公方は伊豆国堀越ほりごえ(現静岡県伊豆の国市)に御所を構え、堀越公方となります。そこに新たな勢力として京都から下向した伊勢盛時もりとき(のちの北条早雲)が現れます。盛時は堀越公方の家督争いの際に伊豆を手中に収め、やがて、関東に進出してきます。このように、戦国時代の関東は、古河公方足利氏、山内・扇谷両上杉氏及び伊勢氏(のちの北条氏。鎌倉時代の北条氏と区別するため、後北条氏と言っています。)の4大勢力がそれぞれ領地の拡大を巡って鎬を削っていました。

さて、河越城は上杉持朝の命により、太田道真・道灌父子が江戸城とともに、長禄元年(1457)に築城したとされていますが、当時の河越城の様子は僅かな書物に記述が見られる程度に過ぎません。しかし、ここ数年の発掘調査によって、江戸時代以前の堀などの遺構が発見され、断片的ながら中世河越城に関する資料が蓄積されるようになりました。その一方で、江戸時代以前の河越城とは扇谷上杉氏時代のものか後北条氏時代のものかを断定する資料が乏しいという現実もあります。そこで注目されるのが、出土した「かわらけ」です。かわらけとは中世以降に使われた素焼きの皿で、宴会や儀式の際に使われたと考えられ、基本的に再使用されることのない器とされています。つまり、使用期間が限定されることから、時代を判断するのに適した考古資料とすることができます。最近の研究で、かわらけは戦国大名ごとに異なるスタイルを持っているという説が提唱され、今回の第30回企画展「後北条氏と河越城」においてもその試案をもとにかわらけの展

示を行っています。

シンポジウム

本事業は午前10時に開会し、午前中に基調報告、午後は問題提起をいただいてからシンポジウムという順で行いました。

① 基調報告「戦国時代の川越」(駒澤大学非常勤講師 黒田基樹氏)

黒田氏は今回の企画展図録にも御寄稿いただき、その内容に沿って関東の戦国時代の概要や後北条氏と川越の関わりについて、詳しく話してくださいました。ややもすると難解な戦国時代の関東ですが、黒田氏の永年蓄積された豊富な知識と情報によって、一般の方にも分かり易いお話になりました。

② 基調報告「出土資料に見る後北条氏」(小田原市教育委員会 佐々木健策氏)

佐々木氏は考古学的な見地から後北条氏の領国内の調査例や小田原城の例と川越などを比較しながらのお話でした。佐々木氏は川越城の発掘調査にも関わられ、神奈川県内を中心に関東地方のかわらけや陶磁器、貿易陶磁などを研究されており、今回もそのデータを交えてお話ししてくださいました。

③ 問題提起「戦国時代の河越城」(江戸東京博物館 齋藤慎一氏)

齋藤氏は文献史料にみる江戸城と河越城を対比し、戦国時代の両城の関係を述べられ、また、発掘調査例と絵図などの検討から、河越城の築城過程の私案を発表されました。近世川越城の基本は築城の頃に起源を求めることができるという大胆な仮説をもとに、根城(青森県八戸市)や茅ヶ崎城(神奈川県横浜市)の例を挙げられ、その可能性について論じられました。

④ シンポジウム「戦国時代のかわごえ」

3氏のお話のあとは、いよいよシンポジウムとなりました。シンポジウムでは、会場からの事実確認のあと、会場にお集まりいただいた方からコメントをいただきました。当日、会場には一般の参加者に混じって県内外の中世史研究者や自治体の文化財担当者もいらしており、江戸城や岩槻城の調査事例などの報告もありました。

今回のシンポジウムでは、「後北条氏の領国内における川越の位置付け」をテーマとして設定し、いくつかの課題について討議を行いました。

i) 扇谷上杉氏時代の川越について

後北条氏時代の前の時代ですが、扇谷上杉氏は相模

糟屋を本拠としていましたが、河越城築城以後は川越も本拠といわれていました。糟屋は上杉持朝が相模守護の頃に本拠とした土地で、鎌倉に近いこの地が選ばれたと考えられます。持朝の子定正の頃には扇谷上杉氏が「河越」と呼ばれていることから、定正は河越城に在城していたことはまちがいないようですが、その一方で、太田道灌の暗殺現場も糟屋の定正の屋敷になっています。これは河越城を本拠としながらも、相模守護時代の糟屋の屋敷も継続して使用されていたことを意味しています。また、扇谷・山内両上杉氏が古河公方と争う享徳の乱の頃には、両上杉氏は五十子(現本庄市)に在陣していたことが記録として残っており、その後の長尾景春の乱に際して、両上杉氏の当主は上野国に留まることとなります。乱の鎮圧後、古河公方と両上杉氏が和睦し、一時的に平穏が訪れますが、道灌暗殺後、両上杉氏が決裂して長享の乱に発展すると、定正と定正没後に家督を継いだ朝良は川越を本拠として戦います。川越は山内上杉氏や古河公方勢力との最前線であり、乱後に破れた朝良が引退して江戸城に引き込むまでの本拠地として機能したものと考えられます。

ii) 河越城の石垣と石工について

後北条氏の本城である戦国時代の小田原城には石垣がないものの、同氏が築城・整備した支城・属城には石垣が採用されている城が多くあります。元亀元年(1570)には北条氏政が河越城などの修築のために、石工を武蔵に遣わすという記録があるため、河越城にも石垣があった可能性が指摘されています。小田原には石工善左衛門という職人がおり、小田原城には石垣はないものの城内には大型の井戸など石組みを伴う施設があるため、石工はこのような施設の建設・整備を行っていたと考えられます。つまり、技術はあっても石垣を積んでいないということです。小田原城では、敷石には丹沢山系の石材が混じる酒匂川以東で産出されたものを使い、井戸などの石積みには根府川石と石材が使い分けられています。このことから、石工とは石を切る職人の意味でなく、石材の見立てに長けた人と理解できます。また、石垣の設置には石垣を構成する石材の調達とそれを加工する石工がセットであることが不可欠なため、鉢形城(寄居町)や小倉城(ときがわ町)などの石垣を持つ戦国期の城には玉淀河原の川原石や、小川町・東秩父村付近で産出された緑泥片岩などの石材供給地が近く、その職人たちも揃っていたことが推測されます。川越周辺には石垣に使えるよ



うな石材の供給地が見出せないことから、石垣はなかったと考えるのが妥当でしょう。しかし、当時の石垣は防御施設という機能よりも、城の外側に対して権威の象徴としてつくる「化粧」としての意味合いが強いといわれていることから、城全体に施されたものでなく、大手門などのシンボル部分にのみ作られていたと考えられています。つまり、河越城においては、石垣がない可能性は高いが、部分的に施されていた可能性は否定できないということです。また、石材供給が困難な状況のなかで石垣が築かれていたということであれば、その石垣の持つシンボル性は極めて高いものとすることができます。

iii) 後北条氏領国における川越の位置付け

後北条氏の領国経営は、一門衆ごとに鉢形領・松山領・岩付領・滝山領などを分割統治する手法がとられていました。黒田氏のお話では、それぞれの「領」は独立国に近いものと考えてよいのではないかとのことでした。川越は小田原本城の支配域の最北端にあたる拠点でしたが、安定期を迎えると広大な後北条氏の領国においては、最前線になることがありませんでした。この「領」を考える時に重要な鍵となるのが、「かわらけ」の流通です。戦国時代の関東においては、前述のとおり、各大名ごとに固有のスタイルのかわらけがあり、川越城内の発掘調査でも「扇谷上杉氏のかわらけ」・「後北条氏のかわらけ」が在来のかわらけに混じって出土しています。しかし、「扇谷上杉氏のかわらけ」の出土量に比して、「後北条氏のかわらけ」が少ないので、戦乱が多かった扇谷上杉氏の時代にかわらけが多く、安定期に入って、直接戦乱の場になることがなかった後北条氏の時代にはかわらけが少なかっ

たという可能性も指摘されました。後北条氏領国時代の川越は、拡大期にあつては最前線として、政治的・軍事的拠点であり、安定期にあつては、本城支配域の最北の拠点として周辺地域の政治的中心であったとすることが推測されました。

おわりに

今回のシンポジウムは、現在の関東の戦国時代研究を最前線で支える3名の先生をお迎えして、戦国時代の川越についてお話をいただきました。参加された皆さんには、あまり目にする事のない、歴史研究の最前線の議論がどのようなものかを御覧いただき、このような議論によって歴史研究が進められているということ、実際に体験していただけたかと思えます。いつもの歴史講座とは趣の違った事業になりましたが、御来場いただいた多くの参加者の皆さんから概ね好評が得られたことを何よりの成果と考えております。また、先生方には御多忙な時期に御参加いただいたことを感謝するとともに、御静聴いただいた参加者の皆さんにも深く御礼申し上げます。

(教育普及担当 天ヶ嶋岳)



特設会場のようなす



「食の器－暮らしの器と魯山人の器－」

<はじめに>

平成19年度市町村立美術館活性化事業第8回共同巡回展「北大路魯山人 世田谷美術館所蔵 塩田コレクション」（財団法人地域創造助成）を11月3日から12月16日まで開催しました。博物館ではその関連展示として「食の器－暮らしの器と魯山人の器－」をテーマに収蔵資料の中から、膳、ワン（椀・碗）、皿、鉢などの食の器を展示しました。

<暮らしの器>

膳と食器 膳は食器をのせる台をいいます。古代には、膳を「かしわで」とも読み、その語源はカシワの葉に食物を盛ったことによるといいます。そのため膳のはじめは、簡単な一枚の紙や板などであったのかもしれない。今日、神饌を盛るのに使用される折敷は、薄板に縁を付けたものですが、中世の絵巻物「餓鬼草紙」では、酒宴の席で坏（食物を盛るワン形の器）をおく台として描かれています。この折敷が原形となつて、その後の多様な膳の発展がありました。

塗りものの椀と焼きものの碗 飯や汁などを盛る器をワンといいます。素材によって木製のワンを「椀」、陶磁製のものを「碗」と書き分けています。今日では、ご飯は陶磁製の碗に、汁物は木製の椀に盛ることが常態化しています。室町時代以降に定まったとされる正式な膳組みでは、膳にのるメシワン（飯椀）・シルワン（汁椀）・ヒラワン（平椀）・ツボワン（壺椀）はすべて塗りもの（漆器）でした。しかし、江戸時代中期以降に磁器が普及してくると、伝統的な膳組みの中にも漆器にかわって磁器が取り入れられるようになりました。焼きものの碗には、陶器のものと磁器のものとがあります。とりわけ江戸時代に各地で磁器の生産が始まり、安価な製品を大量に生み出すようになると、民間で磁器の器が使われるようになります。陶磁器の碗をチャワンと呼ぶのは、もともと焼きものの器が喫茶に利用されたためで、後には焼きものの碗全般をさす言葉になりました。

皿 漆器を中心とする江戸時代の膳組みで、いち早く取り入れられた焼きものの器は皿と小鉢でした。江戸時代後期の風俗をまとめた『守貞謾稿』（喜多川守

貞著。1837年起稿、1853年脱稿、1867年加筆。）の「膳」の項には、「焼物皿 猪口 手しほ皿 この三器は磁器を用ふるなり」とあります。ここには焼物皿と手塩皿の二種類の皿がでてきます。焼物皿は、その名のとおり焼魚などをのせるものです。また手塩皿は小皿のことで、漬物や薬味を盛るのに使いました。現在でも小皿のことを「オテシヨ」と呼ぶことがあります。

鉢 『守貞謾稿』には、「猪口にはあへもの等をもる」とあります。ここでいう「猪口」は、深めの磁器の小鉢のことで、皿とともに江戸時代後期に、膳組みに取り入れられるようになりました。江戸時代の文献では、しばしば小鉢のことを「猪口」と表記しています。形は口が広くすぼんだものや、筒胴のもの、八角のものなどがあります。この猪口は、後に蕎麦猪口や酒猪口に転用されるようになります。猪口が小鉢とすれば、それより一回り大きな中鉢や大鉢などもやがて出回るようになります。汁気の多い料理などを盛り付けるために鉢が発達したものと考えられます。

<魯山人の器>

北大路魯山人は、明治16年(1883)に京都の上賀茂神社の社家に生まれました。本名を房次郎といい、ほとんど独学で書、篆刻を修め、大正10年(1921)に「美食倶楽部」、大正14年には「星岡茶寮」を開きました。魯山人は、大正11年頃から食事と食器の組み合わせを考えた作陶を開始し、昭和2年(1927)に鎌倉に「星岡窯」をおこし、独特な作調をもった飲食器を数多く制作しました。

魯山人は、なぜ作陶を志したかの問いに、それは自分の有する食道楽からそもそも起こっていると答えています。おいしい食物にはそれにふさわしい美しさのある食器を欲求し、それに盛らなくては不足を訴えるようになったというのです。そのため、自ら料理を盛るのにふさわしい器を作り始めました。魯山人が、「器は料理の着物」「器と料理は車の両輪」などと唱えていたことはよく知られています。魯山人の器は食と結びついており、料理を盛り付けるための器でした。

（学芸担当 大野政己）

学校教育のための博物館活用の手引き「やまぶき」第11集

—コンピュータを介した博物館資料の活用—

川越市立博物館では、開館当初から博学連携を目指し、様々な研究や取組が行われています。その一つとして、市内小・中学校の先生方が中心となって組織する博物館利用研究委員会があります。平成17・18年度は、「学校におけるコンピュータを介した博物館資料の活用」を研究主題として、児童・生徒が主体的に学習に活用できると同時に、先生方の指導資料としても活用できる学習シートを各教科等で作成しました。

近年、学校においてコンピュータや情報通信ネットワークが整備されるとともに、当館ホームページにも資料検索システムが導入され、館に収蔵されている民具を中心とした約7,000点の資料がいつでも誰でも検索できるようになりました。そこで当委員会でも、従前冊子で刊行してきた博物館資料の学習方法や活用事例をまとめた博物館活用の手引き「やまぶき」を、第11集はすべてのデータをデジタル化し博物館のホームページ上に掲載し配信することになりました。

この「やまぶき」第11集は、「国語」「社会」「生活」「英語」「音楽」「図画工作・美術」「家庭」「総合的な学習の時間」のそれぞれについて、学習シートを掲載しています。ネット上に掲載するにあたって、児童・生徒用と教員用の2種類にサイトを分けて掲載するようにしました。これは、当館のホームページがすでに児童・生徒用と教員用の2つのページがあるため、その枠組の中に掲載していく必要があったことと、児童・生徒が直接ネット上から学習シートを活用して学習を進められるようにするため、学習シートのみを提示した児童・生徒用のサイトと、先生方が学習シートを活用した授業を計画する中で、指導のねらいや活用事例等を網羅した教員用サイトを必要としたからです。

さて、児童・生徒がコンピュータで「やまぶき」第11集を検索した時から、博物館資料を身近に感じ学習への興味・関心を高め、主体的な学びとなるような動機付けが学習シートに必要となります。そのため学習シートの作成に際して、次のことに配慮しました。まず、児童・生徒がネット上の資料検索システムを活用するには、自らの力で資料を検索できるようにしなくてはなりません。コンピュータに関する知識や能力は一人一人異なりますし、学校によって情報教育の指導内容は様々です。そこで、今回の学習シートでは、相

当学年の標準的なコンピュータ活用能力を中心に設定しました。例えば、小学校低・中学年は、クリックを利用した階層の進み方にし、高学年以上の場合は、検索エンジンのボックスに資料名を入れて検索するようにしました。次に、児童・生徒が効果的に「資料との対話」ができるように、資料の説明、資料を見る視点、資料を基にした活動を具体的に記述しました。また、視覚的な効果を高めるため、イラストや図、写真を多く利用するとともに、色の使い方にも工夫しました。

【例】『「神田ばやし」ってどんな音楽だろう』

—小学校4年音楽—

「音楽」では、学習に対する関心・意欲を高めるばかりでなく、未体験の音や音楽であってもイメージを働かせ、様々な角度から音楽をとらえて課題意識を持つことができるようにしたいと考え、主に学習の導入部分で活用できる学習シートを作成しました。例えば、本学習シートの題材である「神田ばやし」は、「川越まつり」にも関係があり、地域社会で親しまれ、生き続けてきた音楽であるということを実感できるものです。そこで、資料検索システムの資料（「江戸名所神田祭り」・「東京神田祭礼之図」・「神田御祭礼之図」）から「まつり」のイメージ（使用している楽器や雰囲気等）を膨らませ、実際にお囃子の演奏をする表現活動の学習ができるように作成しました。

今回、当館がネット配信した「やまぶき」第11集は、児童・生徒がコンピュータを利用して博物館資料を活用した主体的な学習によって、「調べる力」「考える力」「表現する力」を各教科等の特性を生かして身に付けることをねらいとしています。博物館は、活用の工夫によって様々な可能性が存在する学習の場です。このネット配信された「やまぶき」第11集が、川越市内の児童・生徒だけでなく、全ての学校で博物館・文化財を活用した学習機会の充実を図り、博学連携の推進の一助となれば幸いです。（教育普及担当 井口修一）



「やまぶき」第11集 ホームページアドレス

教員用：<http://museum.city.kawagoe.saitama.jp/yamabuki-kyoin/>
児童用：<http://museum.city.kawagoe.saitama.jp/yamabuki-jidou/>

Information

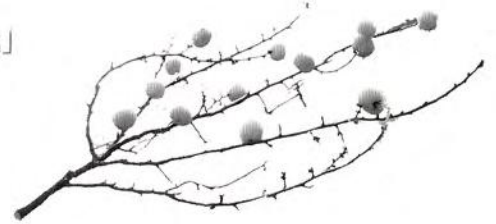
平成19年度の博物館行事です。(3月まで)

講座・教室 etc.

	※ 開催日	講座名	内容	申込み開始日
12月	○ 8(土)	土曜体験教室	たこを作ろう	12/1(土)
	○ 22(土)	土曜体験教室	お正月飾りを作ろう	12/2(日)
1月	○ 12(土)	土曜体験教室	まゆ玉飾りを作ろう	1/4(金)
	● 19(土)・20(日)	縄文土器作り講座	土器作り	1/5(土)
	○ 26(土)	土曜体験教室	まとい体験	1/6(日)
2月	○ 9(土)	土曜体験教室	手作りおもちゃで遊ぼう	申込み不要
	● 17・24、3/2(日)	博物館歴史講座	古代官衙を探る	2/1(金)
	○ 23(土)	土曜体験教室	おひなさまを作ろう	2/2(土)
3月	○ 1(土)	子ども博物館教室	昔の織物に挑戦	2/3(日)
	○ 8(土)	土曜体験教室	昔の土笛・土鈴作り	3/1(土)
	○ 22(土)	土曜体験教室	くさり細工を楽しもう	3/2(日)

※●……一般向け事業 ○……子ども向け事業

※変更の可能性もあります。申込み方法も含め、詳細については「広報川越」またはホームページを御覧ください。お問い合わせは博物館まで。
土曜体験教室は、午前10時～11時30分と午後1時30分～3時30分の時間帯で行います。



御 紹 介

〈博物館受付でお求めいただけます〉



第二七回企画展

川越の大絵馬
— 絵柄に託された人々の願い —
A4判 七二頁 七〇〇円

川越市内に残されている大絵馬の中から代表的なものを紹介しています。



第二八回企画展

柳沢吉保と風雅の世界
A4判 八〇頁 七〇〇円

吉保の人物像を、学問・教養の面から紹介しています。



第二九回企画展

子どもの世界 - 祝いと遊び -
A4判 七二頁 七〇〇円

子どもの成長にかかわる祝い事と、「川越の四季」屏風から子どもたちの遊んでいる姿を紹介しています。

むかしの勉強・むかしの遊び

平成20年1月16日(水)～3月2日(日)



木枯らし吹く街角に、カランカランと鐘が鳴り響いています。横丁を曲がると、そこには石焼芋の屋台がありました。すぐ前の駄菓子屋では、子どもたちが歓声を上げています。お父さん、お母さんの子どものころには、日本のあちこちでこんな風景が見られました。家の中では、家族がこたつを囲んでテレビを見ています。台所では夕飯のしたくが調いました。「今日はおなべよ。」お母さんの明るい声が聞こえます。

今回の展示は、そんな「くらしの中のぬくもり」をテーマにしています。

利用の御案内

◆入館料

区分	博物館	川越城本丸御殿	川越市蔵造り資料館	共通入館(観覧券)			
				●博物館 ●美術館	●博物館 ●本丸御殿 ●蔵造り資料館	●博物館 ●本丸御殿 ●蔵造り資料館 ●美術館	●博物館 ●本丸御殿 ●蔵造り資料館 ●美術館 ●まつり会館
一般	200円 (160円)	100円 (80円)	100円 (80円)	300円	300円	450円	650円
大学生 高校生	100円 (80円)	50円 (40円)	50円 (40円)	150円	150円	220円	450円

※()内料金は、団体[20名以上、1名につき]の場合

◆開館時間 午前9時から午後5時まで(ただし入館は4時30分まで)

◆休館日 月曜日(休日の場合は翌日の火曜日) ※平成20年10月20日は開館予定
第4金曜日(休日を除く、例外あり) 年末年始(12月28日～1月4日)
館内消毒(6月下旬予定) 特別整理期間(12月下旬)

*開館時間・休館日は、博物館・川越城本丸御殿・川越市蔵造り資料館とも原則として同じ
(館内消毒・特別整理期間は博物館のみ休館、蔵造り資料館は1月2日から開館)

交通案内

東武東上線・JR川越線 川越駅より
または西武新宿線 本川越駅より
東武バス「札の辻」下車徒歩8分
・御来館の際は、なるべく電車、バスを御利用ください。



12月

日	月	火	水	木	金	土
						1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	29
30	31					

平成20年1月

日	月	火	水	木	金	土
		1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30	31		

2月

日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	

3月

日	月	火	水	木	金	土
						1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	29
30	31					

※●印は、3館休館、●印は、2館休館(博物館、本丸御殿)、●印は、1館休館(博物館)

編集後記

先日、子ども博物館教室「親子よろい作り教室」を開催しました。親子で力を合わせて、一つのよろいを作る教室です。作業工程が多く一日で完成できるか職員は内心不安だったのですが、無事全員が時間内に完成し、そろって本丸御殿で記念撮影をすることができました。子どもたちは、自分で作ったよろいを着て、みんな誇らしげで、どの子もかっこよく、とてもよく似合っていました。本丸御殿が少しの間、サムライの時代にタイムスリップしたひとときでした。

発行日 平成19年12月28日

発行 川越市立博物館

〒350-0053 川越市郭町2丁目30番地1 ☎049-222-5399 FAX 049-222-5396

Eメール hakubutsukan@city.kawagoe.saitama.jp

ホームページ http://museum.city.kawagoe.saitama.jp/